

Minoru Kunifuji

國藤稔



●プロフィール

1962年生まれ。東京芸術大学大学院造園デザイン専攻修了。
アジアの古典芸術を学ぶため、
大学時代に2年間インドネシアの国立芸術大学に留学。
別世界をつくりあげる「小宇直」の古典芸術に触れたことで、
日本の庭がもつ「小宇直」の世界観に魅了される。
6年間の造園会社勤務を経て、2003年に「庭のクニフジ」を設立。
同年、長野県技能競技会造園工事において銀賞受賞。
視覚効果を利用した空間演出を得意とする。
[造園技能士]

安曇野という豊かな自然環境の美しさを求めて居住されている方からのご依頼が多く、また自分自身もその美しい恵みに助けられながら庭をつくらせていただいております。造園というより「移植」や石の「移設」などです。多くは建築前の造成時に壊された自然の斜面や、既存の雑木たちを再生させる作業です。常に大きな何かを感じながらつくっています。その大きな何かから発生する波紋の一片が形となって目の前に現れます。お客様の言葉、現場の地形、太陽の向きなどは、その大きな何かを示唆しています。

以前から、庭は料理に似ているなと感じていました。庭師はシェフと同じ役割かと思っていましたが、最近どうやら違うということがわかってまいりました。「自然の力」がシェフであり、庭師は自然の恵みをお客様に味わっていただくための、料理を引き立てるお皿や便利なフォークのような存在であると感じています。

よく使い込まれた道具が好きです。その道具からいろいろな景色が浮かんでいきます。村や町の風景のなかにも、川辺に設けられた洗い場や公共の井戸周りなど、長年使い込まれた痕跡が見え隠れしています。そのような「気配」のある風景がとても好きなのです。庭も目前の木や石などではなく、それらの間に存在する「気配」から大きな何かを感じられるようにつくられたら、と思っています。

情報の多すぎる今の時代、「庭」は希薄になりつつある一番大切な「自分」を見失わないための古典的なメディアではないでしょうか。私はその必要性を提案し、できるだけ人々の心の声を形にしていきたいと願っています。



広がる包む…… 一足ごとにうつろう

東西に広がる長い敷地。その中央にある玄関を境に、西奥には和風庭園、東側には明るいアプローチと雑木の庭をつくった。東から来るゲストの視点では和風庭園が明るい雑木の奥に見え、和風庭園からの視点ではアプローチが枯山水に見えるような、相互に演出し合う関係を試みた。

所在地：長野県山形村・個人邸
施工面積：約500㎡





水の潤いと明るさの対比する

敷地内の井戸水を生かした庭づくりがお客様のご要望であった。敷地の中央に位置する流れと、水辺の山野草、それを囲む雑木林。アプローチはその流れを橋で渡り、水辺の日陰エリアから明るい芝生へと導かれるように仕上げた。

所在地：長野県松本市・個人邸

施工面積：約300㎡

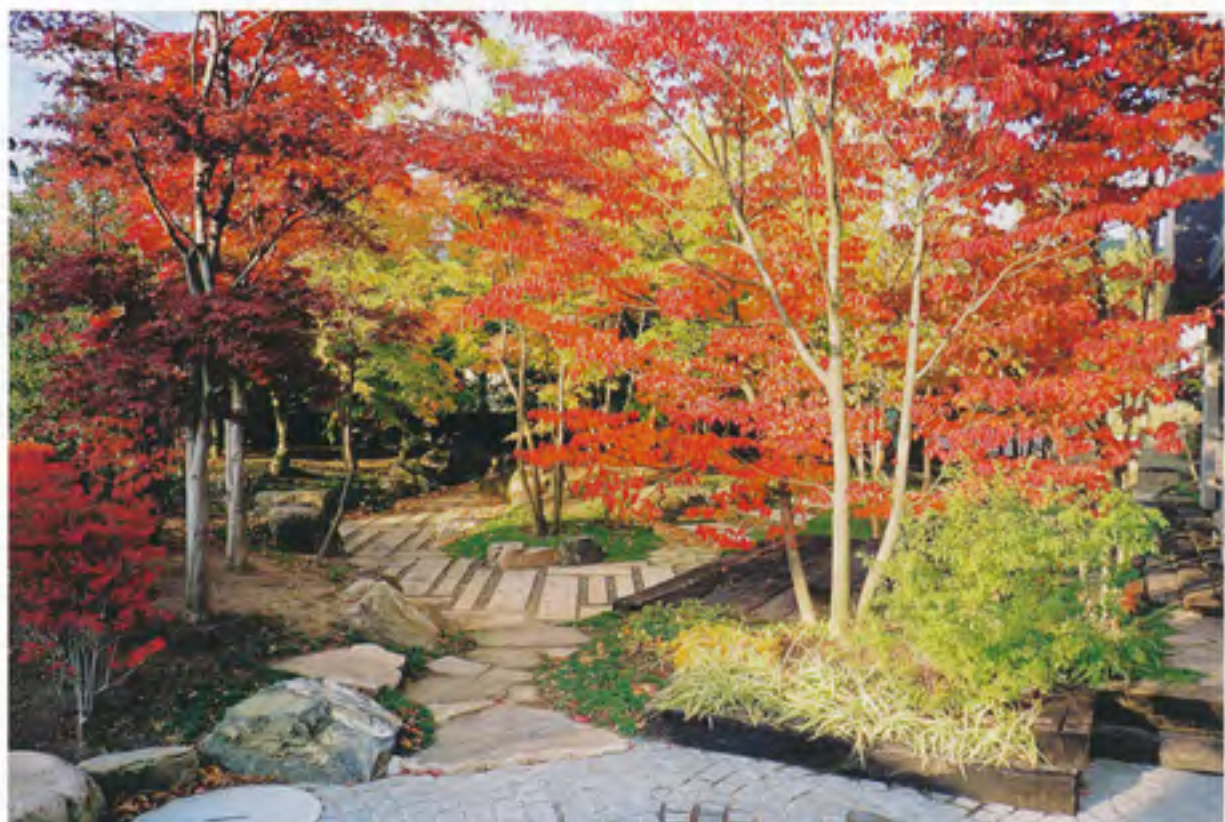


緑を浴びる

普段は東京在住のお客様であるため、都会の生活とは対照的に自然に包まれる環境を理想とした。施工前は木が1本もない平坦な住宅造成地。そこへ自然の起伏とともに雑木林を丸ごとコラージュしたように作り、人工物である敷石、階段、デッキなどが逆に自然に侵食されていったように下草や雑木類を植栽し、植物の生命力を演出した。

所在地：長野県松本市・個人邸

施工面積：500㎡





庭の気配をつくる

病院の手術室前の窓から見える庭。建物の上であり、日照時間も短いため条件的に生きたものは使えなかったが、材料は自然物にこだわった。半具象、半抽象な表現で、本当の自然の一部を切り取るのではなく、「自然界」というものを象徴的に表現。林立した竹が空を、木材が大地を、砂利が水をそれぞれ象徴している。

所在地：長野県長野市・篠ノ井総合病院
施工面積：約20㎡

「睡る」をつくる

現在作庭中の庭。植物の繁殖と共にゆるゆるとつくっている。裏山の斜面の土留めを兼ねた造園設計というご依頼であった。ただ石で留めるのでは圧迫感が残ると思い、古いお城の石垣が半分朽ちて残り、そこに山から下りてきた苔や雑木たちが覆い被さった様をつくっている。今年は雑木を植栽した。

所在地：長野県北安曇野郡池田町・個人邸
施工面積：約300㎡

